

# 科学としての批評

— N. フライの批評について —

中 沢 久 明

## 1

文学作品を批評する (criticize) という行為のなかには、多かれすくなかれ批評家の、作品に対する価値評価 (value judgement) がふくまれると考えられる。

たとえば T. S. エリオットは「批評の機能」(*The Function of Criticism*) (1923) において「批評の目的は芸術作品の解明 (elucidation) と趣味の是正 (the correction of taste) である、と思われる。」<sup>(1)</sup>とのべる一方、1932年ハーバード大学において行った講演「詩の効用と批評の効用」(*The Use of Poetry and the Use of Criticism*) の序講において「批評の第一歩はすぐれた作品をえらび出し駄作をしりぞけることで、そのもっとも厳しいテストは新しいすぐれた作品を選び、新しい状況に正しく反応する能力のテストである。」<sup>(2)</sup>といている。

また T. S. エリオットとならんで現代の文芸批評に決定的な影響を与えた I. A. リチャーズは批評を「諸経験を識別しその経験を価値づけようとする努力である。」と規定し、「我々は経験の性格について理解せずに、また価値づけや伝達の理論なしに批評を行うことはできない。」と考えた。<sup>(3)</sup> こうした立場から諸芸術の経験がいかに伝達され、またそれがどんな価値をもつかを心理学的に解明しようとした。

このように立場のちがいはあるにしろ、作品、作家に対するなんらかの価値評価という側面が批評行為のなかには存在しているといえるであろう。価値評価という言葉自体、今日ではある意味で「批評」そのものの同意語となっているとすら考えられているのである。<sup>(4)</sup>

ところで今私たちが考察の対象にしようとしているカナダの文芸批評家、N. フライ (1912-) はこうした価値評価にかゝわらないで批評を行う、という態度をとっている。価値評価にかゝわらない批評とはなにか、それはどんな形態をとるのか、など大きな問題がそこにはふくまれていると思われる。このことからどういう結論をひきだすにしろ、まづ私たちは彼の意見に耳をかたむける必要があるだろう。文芸批評における価値評価の問題を出发点として私たちは、現在、「神話批評」によって注目をあつめつゝあるフライの批評理論の前提をなしている基本理念とその問題点をあきらかにしていきたいと思う。

## 2

なぜフライは文芸批評から価値評価を排除しようとするのであろうか。一般に価値評価が

行なわれるプロセスについてすこしふれてみる必要がある。私たちが文学作品を読んだとき、その作品からさまざまな印象を受けとる。作品に対する読者の反応は、その知性、感受性、教養、趣味等によって種々様々である、といってよいだろう。価値判断は大なり小なり、このように主観的、作品に対する直接的経験にもとづいてなされる。したがって、批評的な読み方は「審美的対象としての詩の諸特質と読者の主観的な精神状態との間のたえざる相互作用のなかにある。」<sup>(5)</sup>といわれるのももっともである。ほかに古典的作品のもつ諸特質、ルールや原理、というようなある基準や価値のものさしによって詩人や詩のランクづけをおこなう方法もあるが現代においてはほとんどおこなわれていない。いづれにせよ「合理的な判断は、文学の問題においては、直接的にしる派生的にしるある感性 (sensitivity) を基礎にしなければ公式化されない。」<sup>(6)</sup>のである。

このように価値に対する感じ方は主観性にかゝるものである以上、個人的で、伝達しがたく、説明しがたいものである、ということが出来る。フライはあいまいな価値観にもとづく批評を、彼の考えている「批評」(これについては後述する)とはなんの有機的なつながりをもたない、と考え、またそのような価値観にもとづいて文学研究がなされるとすれば、文学研究はあまりにも主観的、相対的になりすぎ、なんら首尾一貫した意味を形成することができなくなる、と考えるのである。こうした考え方から、批評から主観性、個人性を排除しようとするのが、フライの一つの基本的な態度である、と私たちは考えることができよう。さらに文学の経験が即、「批評」とはならないことについてフライは次のようにのべている。

文学の経験そのものは、ちょうど宗教的経験そのものが神学ではないように、精神的経験が心理学ではないように、批評ではないのである。私たちは文学の経験において非常に多くのことを感じるし、あれこれ発言できるであろうが、そうしたものは批評においては機能的な役割をはたすことはできない。したがって作品を論じる者のいづく価値観は論理的に批評的検討の一部分とはなりえず、せいぜい心理的、修辭的にその検討に関わりをもつにすぎない。(7)

フライは文学に価値がない、といおうとしているのではないことは当然である。学問の対象として、文学は潜在的な価値を無限に保有する貯蔵庫であると考えている。たゞそうした価値をもつ文学にふれて、その直接的経験を主観的恣意的にのべるという行為を批評とはみなさず、単なる暇つぶしのおしやべり、疑似批評だとみなしているのである。

批評家が価値判断をこころみる場合、よほどの天才でないかぎり、判断のかたより、視野の狭さ、時代的制約をまぬがれない。たとえば、ある時代のAという批評家が多面的な相をみせるある作品の、ある面を高く評価し、他の面を低く評価する、とする。ところが次の時代のBという批評家がまったく逆の評価をくだすということがしばしばある。この場合批評家が作品の評価をするのではなく、いつのまにか、作品の方がA、B二人の批評家のそれぞれの感受性、視野を裁き、それぞれの時代のもつ感性的限界ともいえるものをさらけださせる結果になる。このことをフライはデイッケンズを例に次のように述べる。

ディッケンズを解釈することはまづ研究の条件としてディッケンズ自身の言葉をそのまま受け入れることであり、ディッケンズを評価することは結局評価する私たち自身の言葉を提示することであり、ディッケンズのひどい戯画をつくりだすことになり、ひいては私たちの、私たちの時代の、あからさまな、正確な戯画を示すことになるのである。(8)

## 3

ではフライにあって根本的な批評行為とはなにか。それはそこに在るものを見る、という行為、つまり客観的な認識行為である、と考えている。認識には注釈 (commentary) と解釈 (interpretation) を含めて多くの事柄が含まれる。フライにとって「批評」とは文学作品を主観的、経験的に評価することではなく、客観的認識の対象として作品を研究することである。作品のいかなる面を、いかなる方法で研究していこうとするか。フライはまづ批評的理解の第一歩として文学作品の修辞的あるいは構造的分析、という形態をとるのが正しい、と述べている。しかしたゞ作品の構造的分析というアプローチだけでは、たとえばある作品の構造がいかにして現在のような形態をとるに至ったか、その作品と構造的に見てもっとも近い関係にある作品はなにか、という風に説明を発展させていくことはできない。大切なのは個々の作品 (部分的文学現象) を詳細に分析する、ということだけではなく、それらの現象を論理的、系統的に説明し統合しうるような中心的な仮説をくみだてることである、とフライは考える。こうした仮説が第一にそなえていなければならない基礎条件は、他の科学の場合と同様、全体的な首尾一貫性を仮定しなくてはならない、ということである。これは科学があつかう事柄に関して全体的な首尾一貫性が必要である、ということではなく、科学そのものが論理的な首尾一貫性をもっている必要がある、ということである。だからたとえば自然のなかに秩序が存在している、という信念は、自然科学が自然現象を知的に、わかりやすく説明することができる、という推論から生れてくる。もし仮に自然科学が完全に自然の秩序を論証したら、おそらく自然科学は追求するテーマがなくなってしまうだろう。フライは続けている。

批評は一つの学問として (as a science), すべて知的に了解しうるもの (intelligible) でなければならない。文学は学問の主題として (as the subject of a science) 私たちが知るかぎり、新しい批評的発見のつきせぬ源泉であり、このことはたとえ新しい文学作品が書かれなくなってもいえることであろう。(9)

批評を学問として、科学の一部門として成立させようとするフライの意図はこれである程度はつきりさせることができたように思う。

## 4

批評の予備的な作業は先ほどすこしふれたように作品の構造を分析する、ということであった。そのことをもうすこしくわしく説明しなくてはならない。詩人は独自の個性によって詩を創作する。逆にいえば詩にはその詩人の独自のイメージが使われ、また詩人の経験を反映したなんらかの思想の展開がみられることは今さら云うまでもないことであろう。したがって詩の解明にその詩を書いた詩人の伝記的な事実の探求が一つの大きな意義をもつものであることはあきらかである。

しかしフライが特に問題にしようとするのは詩人のそのような伝記的側面ではない。いいかえれば一篇の詩（作品）の個別性、独自性、歴史性、といった側面ではない。時代や環境を異にした多くの詩人の詩のなかにくりかえし用いられる同じイメージ、シンボル、コンヴェンション、といったもの、つまり詩の普遍的、共時的側面である。たとえば詩人オーデンの批評集 *The Enchafèd Flood* (1950) がしめしているように、海という重要なシンボルはシェリイやキーツやコールリッジなどの詩のなかにとどまらず、その他多くの詩人にひろく使われ、ついには文学の原型的象徴とならざるをえない。このことはイメージについてのみならずドラマ、小説といったジャンルの問題にもあてはまる。そのようなジャンルが歴史的な起源をもっている、と考えるとすると、たとえばドラマというジャンルはギリシャの宗教から出現したのときわめて似かよった形をとって中世の宗教から出現したのはなぜだろうか？これは起源の問題というよりもむしろ構造の問題であり、イメージの原型（アーキタイプ）と同様、ジャンルの原型もあるのではないかと思わせるものがある。

このように個々の作品のなかにくりかえし用いられるものを、帰納的に探求分析し、原型（アーキタイプ）をつきとめることがフライの批評の重要な手続きである。

しかしながら彼はこのような帰納的な処理だけで批評理論を組み立てることで充分だ、とは考えていない。同時にもう一つの、帰納法とは対照的な演繹的アプローチの必要性も強調している。そのために彼は大体次のような仮説をたてている。

## 5

人間（動物）の生活は自然界のリズムないしくりかえしの運動と密接に結びついている。自然のエネルギーと人間のエネルギーとを同時に合体させようとする意志のあらわれたものが祭式 (ritual) であって、この祭式から収獲の歌、収獲のいけにえ、といったような慣習が生まれる。フライはこの祭式のなかに物語 (narrative) の源をみつけることができる、と考える。もし仮りにそうした物語が現存するとすれば、それは自動的で無意識的なくりかえしだろう、と考えられる。祭式はまた、いろいろな要素をふくんだ (encyclopedic) ものになる傾向をつねにもつものである。そして自然のなかでくりかえされるもの、日、月の相、四季、夏至、誕生から死にいたる人間の生死にかゝわる大事な分かれ目、には祭式がかならず伴うものである。

他方、イメジャリイのパタン、あるいはなんらかの意味 (significance) をもった断片的

なことは神託 (oracle) に源をもつもので、時間には直接関係なく、一瞬のうちにぱっと了解するものである。われわれがことわざ、なぞなぞ、十戒などといった形で、そのような意味の断片をつかむときには、もうすでにそこにはかなり物語的要素が存在している。これもまたエンサイクロペディックになる傾向をもっている。そしてでたらめで経験的な断片から、一定の意味をもつまとまりをきづきあげていく。原型的な意味 (archetypal significance) を祭式に与え、原型的な物語を神話に与える中心的な力をなすものが神話 (myth) だとフライは仮定する。それ故に神話はすなわち原型であるのだ。しかし物語に言及するときだけ神話といい、意味についてのべるときには原型 (archetype) といった方が都合がよい。

一日の太陽の運行、季節のサイクル、人間の生命のサイクル (誕生、結婚、子の誕生、死) のなかに、一つの意味のパタンがある。そしてこの意味のパタンから神話は、一部分は太陽でもあり、植物豊じよう神でもあり、神でもあり、原型的人間でもあるような一人物を中心に物語をくみだてるのである。神話の決定的な重要性を文芸批評家にしめたのは、ユンクと、とくにフレイザーであった。

太陽、四季、人間の生命、神話のなかの英雄、物語の原型などの相互の関係が具体的にどういう形をとって解釈されるのか四つの相を紹介しよう。

1. 夜明け、春、誕生の相。英雄の誕生の神話、復活と再生の神話、創造の神話そして (四つの相は一つのサイクルをなしている) 闇、冬、死の力の打倒の神話。この神話に従属する人物は父と母。ロマンスの原型であり、ほとんどの酒神讃歌の詩および熱狂的な詩の原型。

これを見て大体の見当がつくように、日の出という太陽の相は、季節の相でいえば万物が芽を出す春であると考えられる。こうした自然現象は人間の誕生という生命現象とアナロジカルに結びつく。太陽-神 ("sun-god") とか木-神 ("tree-god") というような概念は、太陽と神、木と神とを同一視 (identify) しようとする精神のあらわれであると考えられる。つまり自然現象に人間の生命活動を同化させようとするときに神話が用いる二つの大きな概念原理は類推 (analogy) と同一化 (identification) なのである。<sup>(10)</sup> 以下三つの相は次の通りである。

2. 天頂、夏、結婚ないし勝利の相。神をあがめる神話、聖なる結婚の神話、天国へ入る神話。この神話に従属する人物は仲間と花嫁である。喜劇、牧歌、田園詩の原型。
3. 日没、秋と死の相。没落の神話、死なんとする英雄の神話。激しい死と犠牲の神話であり天国へ入る神話。この神話に従属する人物は裏切者と魔女サイレン。悲劇と悲歌の原型。
4. 闇、冬と死滅の相。こうしたものの勝利の神話、洪水の神話と混沌への回帰の神話、英雄の敗北への回帰の神話。神々のたそがれ (Götterdämmerung) の神話。この神話に従属する人物は鬼と魔女。風刺詩の原型。

さらにフライは諸宗教の聖典を形づくっているさまざまな神話（天地創造、洪水、探索、など）を文芸批評家は学ばなくてはならない、という。神話の構造を理解したのち批評家は原型から叙事詩、ドラマなどのジャンルへとくだってきて、たとえばドラマは神話の祭式的側面から生まれてきたものであり、叙情詩は神の出現（epiphany）にかゝわる側面から生れたものである、というような認識をうることができる、という。

そして文芸批評家は、文学のジャンルはすべて探索神話（quest-myth）から派生してきたものであることをしめし、探索神話こそどんなものであれ、将来の批評の入門書の第一章を構成するものである、とのべている。

フライの仮説の要点については大体以上のとおりである。もちろんのべるべきことがらはまだたくさんあるけれど、われわれの当面の問題から逸脱するおそれなしとしないのでこれくらいにしておきたいと思う。

この仮説を支えているのはさきにもすこしふれたように Sir J. G. フレイザーの「金枝篇」(*The Golden Bough*) とユングのリビド・シンボルに関する研究である。フライは文学のいわば発生学ともいえる分野に、民族学、心理学の成果を援用することによって批評理論をくみたてたということが出来る。

## 6

T. S. エリオットは1956年に「批評の領域」(*The Frontiers of Criticism*) と題してミネソタ大学で講演をした。それは一口にいて New Criticism のいきすぎをいろいろな点で批判し、批評活動の正常なあり方を示唆した講演であったといえる。したがって New Criticism と同一線上にあると考えられるフライの批評上の立場に対してエリオットの観点からいくつかの疑問を指適することができるように思う。

現代批評における文芸批評の変質の原因についてエリオットは二つの理由をあげている。その一つは近代における諸科学（社会科学、心理学、言語学、意味論など）の光をあてて文学を考察するようになったこと、であり、もう一つは諸大学、学校で英米文学の研究が大いにおこなわれるようになった結果、多くの批評家が教師を兼ねるような状況が生れたことだとのべている。たしかにエリオットが指適するように、I. A. リチャーズ以来すぐれた批評家は大半が大学等の教授を兼ねている。したがって批評活動の対象は19世紀の先輩批評家達とくらべて、大分違っている。しかも教授兼批評家達は大学において自然科学の諸分野の成果をたえず意識の片隅におきながら批評活動をつづけている。文芸批評を科学として扱っていかうとするフライの基本的な姿勢はあきらかにこうした状況と密接な関係があると思われる。確かな研究方法に立脚して成果をあげる自然科学の諸分野にくらべて、人文科学、なかんづく文学研究の分野においては研究方法があいまいであるというのがフライの認識である。これは一面的には正しいであろう。しかし、だからといって自然科学の方法をそっくりそのまま文学作品の研究に適用することが、はたして妥当な態度といえるであろうか。文学作品（とくに近代の文学において）は創られたもの、であって、そこにはかならず創り手というものが存在する。他方自然現象はそこにあるもの、であって人間の手によって創られたもの、ではない。したがって、それらを同一の方法で研究することには無理がある、と思

われる。文学作品は作者という個性及び作者の時代的影響を無視しては存在しえないものである。個々の作品のもつ歴史性、独自性、個性性をどの程度考慮して批評理論（もし可能だとすれば、であるが）をきづきあげていくことができるかが問題となるであろう。

また、価値評価に関わらないで批評を行うことができるのであろうか。フライの立場に対するもう一つの疑問である。批評の目的を「芸術作品の解明と趣味の是正とである。」といい、また、それをいいかえて「文学の理解と享受を増すこと。」(to promote the understanding and enjoyment)<sup>(11)</sup>だと T. S. エリオットがいうとき、享受とは芸術作品の偉大さ、面白さを味わうこと、経験することである。そしてその経験を分析していく過程で「この作品はすぐれているか、いなか？」という価値評価に直接的であれ間接的であれ関わっていくことになるのではないだろうか。その場合、価値判断からできるかぎり、かたよりや恣意性を排除するために R. ウェレック教授の次のような主張に耳をかたむける必要があると思われる。（これをパースペクティヴィズムと教授はよんでいる。）

ある芸術作品を、批評家の生きている時代とも作家の生きている時代ともちがった、第三の時代の観点からみること、ある作品についての解釈と批評の歴史全体から概観すること、は大いに役に立つだろう。この態度は作品の総体的な意味を知る手引となる。（中略）われわれは芸術作品の価値をその作品の生れた時代の価値と、その時代につづくあとのすべての時代の価値とに属するものとしなくてはならない。<sup>(12)</sup>

さらに問題だと思われるのはこれまでの批評の流れについてフライはほとんどコメントしていない点である。つまり過去のある批評家のある面を高く評価する、とか批判する、といったような態度がほとんどみられないのである。たゞわずかにエリオットの価値評価が行きあたりばったりで気まぐれだ、と株の売買にたとえて批判しているにすぎず、正面きったエリオット批判になっているとはいえない。批評の歴史に対する認識から批評の目的をあきらかにするというような態度がフライにはみられない。何のために批評理論をきづきあげるのか、その理論にもとづけばある作品の理解をより一層深めることになるのか、といったような点が疑問として残るのであるが、それは今後の検討にまたなければ早急に結論をひきだすことはできないだろう。ともかくエリオットの次のような意見は、現代批評のともすればおちいりやすいあやまちに対する警告の言葉として耳をかたむけなければならぬと思う。

もし文芸批評において理解ということだけを強調すると、理解から単なる説明へおちこむ危険がある。批評がまるで科学であるかのようにあつかう危険におちいる。ところが批評は決して科学になるはずはない。他方、享受ということに重点をおきすぎると、主観的印象的な傾向におちいりやすく、享受は単なる娯楽や気晴らしぐらいにしかならないだろう。33年前「批評の機能」を書いたとき私が困ったものだと感じたのは後者の方のタイプ、すなわち印象批評だったようだ。今日では純粋に説明的なものになる傾向に対して警戒する必要があると思う。<sup>(13)</sup>

## 註

- (1) T. S. Eliot, *Selected Essays* (London, 1932) p. 24.
- (2) T. S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism* (London, 1933) p. 18.
- (3) I. A. Richards, *Principles of Literary Criticism* (London, 1924) p. 2.
- (4) *Encyclopedia of Poetry and Poetics* ed. Alex Preminger (Princeton, 1965) p. 259.
- (5) *Ibid.*, p. 261.
- (6) René Wellek and Austin Warren, *Theory of Literature* (New York, A Harvest Book, 1956) p. 241.
- (7) The experience of literature is not criticism, just as religious experience is not theology, and mental experience not psychology. In the experience of literature a great many things are felt, and can be said, which have no functional role to play in criticism. A student of literature may be aware of many things that he need not say as a critic, such as the fact that the poem he is discussing is a good poem. If he does say so, the statement forms part of his own personal rhetoric, and may be legitimate enough in that context. Naturally a reader of a work of criticism likes to feel that his author is a man of taste too, that he enjoys literature and is capable of the same kind of sensitivity and expertise that we demand from a good reviewer. But a writer's value-sense can never be logically a part of a critical discussion: it can only be psychologically and rhetorically related to that discussion. The value-sense is, as the phenomenological people say, pre-predicative. *The Stubborn Structure* (London, 1970) p. 70.
- (8) To interpret Dickens is first of all to accept Dickens's own terms as the conditions of the study: to evaluate Dickens is to set up our own terms, producing a hideous caricature of Dickens which soon becomes a most revealing and accurate caricature of ourselves, and of the anxieties of the nineteen-sixties. *Ibid.*, p. 69.
- (9) Criticism, as a science, is totally intelligible; literature, as the subject of a science, is, so far as we know, an inexhaustible source of new critical discoveries, and would be even if new works of literature ceased to be written. *Fables of Identity: Studies in Poetic Mythology* (New York, 1963) p. 10.
- (10) *Ibid.*, p. 32.
- (11) *Essays on Poetry and Criticism by T. S. Eliot* (Tokyo, Shōhakusha, 1959) p. 38.
- (12) René Wellek and Austin Warren, *op. cit.*, p. p. 31-32.
- (13) If in literary criticism, we place all the emphasis upon *understanding* we are in danger of slipping from understanding to mere explanation. We are in danger even of pursuing criticism as if it was a science, which it never can be. If, on the other hand, we over-emphasize *enjoyment*, we will tend to fall into the subjective and impressionistic, and our enjoyment will profit us no more than mere amusement and pastime. Thirty-three years ago, it seems to have been the latter type of criticism, the impressionistic, that had caused the annoyance I felt when I wrote on 'the function of criticism'. To-day it seems to me that we need to be more on guard against the purely explanatory. *Essays on Poetry and Criticism by T. S. Eliot* p. p. 42-43.

**Summary**

**Criticism as a Science**

**— About the Literary Criticism of Northrop Frye —**

Hisaaki NAKAZAWA

The purpose of this paper is to show the characteristics of the literary criticism of Northrop Frye.

They are as follows :

- a) He considers the critical act as the act of objective recognition.
- b) He excludes from criticism the value judgement with which most critics have been concerned, because he thinks that it is derived from random impressions.
- c) He studies the literary works with the same attitude or method that a scientist researches natural phenomenon.

In these points, however, there is a question : is it possible for us to see literary works (things which are created by writers) and natural phenomenon (things which are not created but exist) as the same thing ?.

Criticism considered as a science will, if it goes to extremes, exceed the limit of criticism and cease to be criticism, as T. S. Eliot pointed out in "The Frontiers of Criticism".